

## 時間についての四章

### プロローグ

無駄を嫌う資本主義社会における時間の合い言葉は「時は金なり」。いや、JRの脱線事故でたくさんの死傷者がでたにもかかわらず、その後の乗車率が事故前の約90パーセントということから判断すると、現在は「時は命」というべきかもしれない。等速で進む客観的な共同体の時間は、わたしたちに命まで強要する。では、わたしたちがそのなかで手にする「豊かさ」とは、真実なのか、それとも虚妄なのか。

今勉強会では、自己と時間における関係を明確にしつつ、共同体としての時間から個人としての時間への変容を示したい。

### 1章 意識としての、過去としての時間～ベルクソンの考察を中心に～

#### ●空間化された時間とは別の意識としての時間

- ・空間化された時間…ある瞬間の間と間、点と点の間、つまり期間であって、その期間としての時間はどこでも同じ基準で計ることができるような均質のもの。
- ・意識の時間…人間本来の時間は、並列的でもなく、外在的でもない。それは、継起であり、相互浸透性そのものである。ベルクソンは人間本来の時間を純粋持続と呼ぶ。

#### ◆純粋持続の定義

「純粋な持続とは生きることに身を任せ、現在の状態とそれに先行する状態との間に境界線を設けることを差し控える場合に、意識がとる諸状態である。」

#### ●現在に対する認識のアプローチ - 「人は過去の大波に溺れかかっている」

- ・現在という時間における認識は、過去の時間が追認しているものである
- ・知覚とは、記憶から養分を受け取った記憶心像が物質化したもの

Ex. 浮世絵、水墨画、古代エジプトの壁画 etc

## 2章 背丈としての時間～辻信一・本川達夫の考察を中心に～

### ●現代産業の時間軸と生物の時間軸との衝突

#### ◆見田宗介『現代社会の理論』

「世界人口の裕福な人たちの20%が世界の80%の資源を消費している。地球上の人たちが先進諸国の人たちと同じライフスタイルになれば、地球は4つ必要となる計算になる。」

→均衡・浄化・調節といった自然本来が持っている根源的な力が崩壊する。

### ●生物固有の時間

#### (1) サイズの時間

心周期…心像が一回打つのにかかる時間 ex 人間1秒、ネズミ0.1秒、ゾウ3秒。

・こういった時間と体重との関係を調べていくと、どれも体重が重くなるにつれて四分の一乗に比例する

→つまり体の大きい生物ほど動きがゆっくりになる。

「時間が体重の4分の1乗に比例するという事は、体重が2倍になると時間が1.2倍長くゆっくりになる関係です。体重が10倍になると時間は1.8倍になるんです。例えば、30gのハツカネズミと3tのゾウでは体重が10万倍違いますから、時間は18倍違い、ゾウはネズミに比べ時間が18倍ゆっくりだということになります。…ですから、ネズミからゾウを見たら、ただ突っ立っているだけで動かない、これは果して生き物だろうか、って具合でしょう(笑)。逆にゾウからネズミを見たら、ピュッといなくなるわけですから、ネズミなんて果してこの世にいるのか、気にもしていないのかもしれないね。」  
(<http://www2.athome.co.jp/academy/biology/bio03.html> 『ゾウの時間・ネズミの時間』)

#### (2) エネルギーの時間

・本川達夫によると体重から見積もった日本人成人男性の標準代謝量は88.8ワット。

・彼独自の算出によると現代日本人成人男性の標準代謝量は2200ワット。

→人間が生きるのに必要なペースの40倍が現代の人間にのしかかっている。

#### (3) 体内の時間

・原始人間は一本のチューブのような形をしていた。その状態での時間は30億年。

・それだけ多くの時間をチューブですごしていれば体の仕組みも自然の時間に即しているはず。

→現代の激しい時間が、生物固有の時間を圧迫している。

### 3章 存在としての時間～ハイデッガー・木田元の考察を中心に～

#### ●時間の在り方＝人間の在り方

①先駆的な決意の在り方によって、「将来」という時間的な在り方が決まる。

→まだ無いもの（死）へわたしがいつかたどり着く

死をあらかじめ覚悟すると、自分の死は今はまだないけれども、しかしいずれは必ずあるようになる。自分の死というものをあらかじめ先回りしてゆくこと——死への先駆的な覚悟——こういうふうはまだないもの（死）をあらかじめ先回りして捉えることによって、将来と現在が関係付けられる。

・ 将来：現在と無関係ではない。まだないものでありながら、しかも現在と関係付けられている。そして現在の中で生きて働いている——現在の人間のあり方に影響を与えている。

★まだないものでありながら、現在の人間のあり方に影響を与えている。

②被投性（現に今ここに存在していること＝世界内存在）というあり方に関して「過去」というものが決まってくる。

・ 通俗的時間概念としての過去：過ぎ去ってもはやないもの。もはや今でないもの。現在とは関係を持たないもの。

・ 本来的時間概念としての過去：被投性という人間の在り方に則して考えられた。過ぎ去ってもはやないものでありながらも、しかも現在の人間の在り方に影響を及ぼしている。状況の中には、昔投げ込まれた。しかし人はこの過去において一定の状況の中に投げ込まれ、しかもこの状況が、現在の人間の在り方に影響を与えている。たとえば、気が付いてみれば、自分は日本人である。

★既に状況の中にあるというあり方によって過去という時間的な在り方が生まれてくる。

通俗的時間概念としての過去とはまったく違う。

③状況への決意というあり方によって「現在」というものが決まってくる。

★状況への決意をすることによって、状況が人ごとではない自分自身の現実となり、それが自分にとって現にそこにあるものにされる。こういう人間の在り方によって明らかになる時間的な在り方が現在なのである。この現在は人間の在り方とは不可分のものである。

①+②+③：したがって時間というものが人間のあり方に則して捉えられていることがわかる。

おのれを時間化する仕方の違い→各々の世界の組織のされ方も違う→そうするなら各々の存在の仕方も変わってくることになる。

#### 4章 過去としての、背丈としての、存在としての、各々の時間～結論～

☆「留まること」は「共に生きること」

☆「小ささ」としての文化

「人間は小さいものである。だからこそ、すばらしいのである。」

(E・F・シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』講談社学術文庫)

#### 【参考文献】

木田元『ハイデガー「存在と時間の構築」』岩波現代文庫 2000年

辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』平凡社ライブラリー 2004年

ベルクソン 中村文郎訳『時間と自由』岩波文庫 2001年

マルティン・ハイデッガー 細谷貞雄訳『存在と時間』ちくま学芸文庫 1994年

本側達雄『ゾウの時間・ネズミの時間』中公新書 1992年

E・F・シューマッハー『スモール イズ ビューティフル—人間中心の経済学』講談社学術文庫 1986年